

Ⅲ 研究 3 年次の実践から

研究3年次の成果と課題

1 3年次の方向性

私たちは研究3年次、『その子らしく学ぶ』ことの子どもにとってのよさを明確なものとしていきたいと考えた。そこで、子どもの学びのプロセスの中にある、その子の学びを豊かにしているものを見出していくことが研究の価値につながると考え、“心の動きを伴う経験によって、その子に還るもの”という視点をもって子どもの学びのプロセスを分析していくこととした。

ここでは、大研2で行った5年国語科「『生きる』を読む一命がねがい求めるものー（キツネとねがいごと）」の実践、そして各教科の実践を通して見えてきたことについて述べていく。

2 研究3年次の成果と課題

成果

（1）学びのプロセスの中に、「心の動きを伴う経験」の具体を見出すことができた

『その子らしく学ぶ』子どもの学びのプロセスに目を向けていくと、叙述や挿絵などの材、仲間の解釈、教師の言葉など、様々な対象との関わりの中で絶えず心が動いているような様子が見られた。自分と対象とを結びつけながら進んでいく中で子どもは、対象がもつ不思議さや他者とのズレなどの状況と出会う。その状況はその子がもつ背景や、見方や考え方などの「その子らしさ」が働いて認知され、その子ならではの状況となる。そうした状況に直面したその子の中には、例えば不安や困惑、好奇心のような心の動きが生まれ、心の動きの先には、その子と対象との結びつきの変化や、その子の思考の変容といった、その子の学びがさらに進んでいく様子が見られた。そういった一連のプロセスが、子どもにとっては「心の動きを伴う経験」であるということが分かった。（図1）そして、その先にはその子ならではの学びがあることも見えてきた。

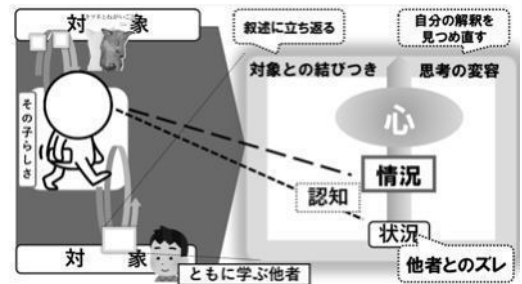


図1「心の動きを伴う経験」の具体

（2）『その子らしく学ぶ』ことの子どもにとってのよさが見えてきた

①『その子らしく学ぶ』子どもは、教科の学びをよりその子の学びとして豊かなものにしていく

大研2において2人の抽出児は、その子の見方や考え方をもち、それらが滲み出たり、それらを発揮したりしながら、「物語の解釈をする」という自身の学びを進めていき物語を深く味わうことができた。同じ物語を読み、学級として3つの問いを共有して進んできた2人であったが、A男は場面や言葉の解釈の変容、B子は心情の解釈の変容や自身の人生観をも見つめ直すことを通して、物語の解釈を深いものにしていった。これらはどちらも「教科の学び」ということができるが、その子にとって学びが意味するものは異なっているということが分かった。心を動かし、思考を加速させたり対象との結びつきを強めたりして、その子がたどり着いていくことで、その子の学びは豊かなものになっていくと考えられる。

そして、各教科の実践とも照らし合わせて改めて「心の動きを伴う経験によって、その子に還るもの」を見つめていくと、子どもは教科の本質を通りながらその教科の学びを獲得するだけでなく、目的に向かう誠実性、自己調整や粘り強さ、他者に対する共感性といったいわゆる非認知能力^{*1}に含まれる力を働かせている様子が見られた。その子の学びにはそういった経験すること自体も含まれており、『その子らしく学ぶ』中で子どもは自分の学びを豊かなものに行っていることが明らかとなった。

②子どもが『その子らしく学ぶ』ことは、他者の『その子らしく学ぶ』に影響する

自分の学びを進める中で子どもは、自分の解釈とのズレがある他者を敢えて選んだり受け入れたりする場面があった。「問いを解決する」という目的への意識を強くもつA男や、自分にとっての意味づけを大事にして学びを楽しみたいB子は、日頃の人間関係にとらわれず、自分の目的の達成や満足感を求めて、そ

のための相手を選び、学びを進めていった。そのような人間関係を越えて学ぶ経験は、学びの選択肢が増えることにつながると考えられる。ともに学ぶ他者と関わるからこそ、その子にとって新しい見方や考え方との出会いが生まれ、その先にその子ならではの選択が生まれていくことが分かった。

③『その子らしく学ぶ』中に見られるその子ならではの多様な学びが、その子の中でどのように関わり合っているかに目を向けていくことは、『その子らしく学ぶ』ことの、子どもにとってのよさをさらに見出すことにつながるのではないか。

「子どもが学ぶ」という営みの中で認知能力・非認知能力の双方の学びが得られていることは『その子らしく学ぶ』研究においても見出されてきた価値の一つである。その子が働かせたり発揮したりしている力は、時に「教科の学び」と結びついていることが色濃く見られた一方で、中には「教科の学び」との関連性が見えづらいものもあった。しかし、学びを点ではなく、プロセスを含めて見とってきた私たちは、そういった「教科の学び」との関連性が見えづらいものの中にもその子の「人間性の涵養につながる学び」が存在していると感じている。「教科の学び」と「人間性の涵養につながる学び」との関連性をさらに見出すことができたとしたら、子どもにとっての学びが意味するものを明らかにすることにつながるのではないかという可能性も感じている。『その子らしく学ぶ』中に見られるその子ならではの多様な学びをより広く見とり、そしてそれらの関連性に目を向けていくことで、『その子らしく学ぶ』ことの子どもにとってのよさをさらに見出していきたい。

課題と研究 4 年次に向けて

（１）その子ならではの多様な学びの具体や、それらの関連性に目を向け、子どもにとって学びが意味するものを探っていく

その子のあらわれや成果物を学びとして単一的に評価するのではなく、そこに至るプロセスの中でその子が働かせている様々な力や、それによって得られる学びまで教師は見とり、それらを含めたものとしてその子の学びを価値づけることが、子どもの深い学びのために重要であると考えます。

（２）授業づくり、教師のかかわりのありようを問い直す

これまでも『その子らしく学ぶ』ことの子どもにとってのよさを追究してきたが、それらの中には、教科の特性が影響していると考えられるものがあったり、その子にとっての材やその子の人間性といった私たちがその子をとらえる幅によっても変わるものがあったりした。また、子どもにとってのよさを見出すと同時に、子どもに対するとらえの解像度が高くなっていくという、私たち教師にとってのよさも明らかになっている。教師にとってのよさもまた、その後の子どもを支えるという意味で子どもにとってのよさにつながると考えられるが、子どもへの実際のかかわりに教師はどうつなげていけるのかは問い続けたい。子どもの「教科の学び」や「人間性の涵養につながる学び」を広く深く見とり、価値づけるための教師の感性や姿勢、授業のデザインについては意識を高くもっていきたい。

（３）本校の教育観や『その子らしく学ぶ』ことの価値を論としていくためのエビデンスの必要性

4 年次の方向性として、その子の中にある学びの多様さに目を向けていくこととなる。その学びの中には認知能力はもちろん、非認知能力とされる実に幅広い力を働かせる経験も含まれている。ただし、非認知能力がいかにかその子に身に付けられ、伸びていくかは非常に見えづらいものである。「人間性を涵養する学び」を語るために、まずはその具体を明らかにしていく必要がある。それは、子どもは自らの内に伸びようとする芽をもっていると考え、子どものありのままをとらえようとする本校の教育観をより研ぎ澄ましていくことに近い。私たちが脈々と受け継ぎ、信じてきた教育観や『その子らしく学ぶ』ことの価値を、子どもの実際の姿とともに、他の学術論とも結びつけてエビデンスとし、論としていかななくてはならない。子どもにとって「真の学び」とは何たるかを明らかにできる可能性が『その子らしく学ぶ』には秘められている。

※1 「認知能力」を知能や技能、学力などの数値化や測定がしやすいものとしたときに、そこに含みきれない思考や感情、行動について個々人がもつパターンや心理特性を「非認知能力」としている。